

壊滅

立野信之



新潮社



壊 滅

昭和三十六年二月二十四日印刷
昭和三十六年二月二十八日発行

定価二九〇円

著者 立野 信之

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京 〇七一一一
振替 東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又は各請求
めの書店にてお取替えいたします。

印刷 塚田印刷株式会社・製本 新宿加藤製本所

© N. TATENO 1961 TOKYO Printed in Japan

目次

第一章	三・一五事件	5
第二章	帰国者	36
第三章	夫の不倫	73
第四章	党生活者	101
第五章	アカハタが出た!	141
第六章	ハウス・キーパー	167
第七章	夫の帰宅	192
第八章	春の日に	215
あとがき		243

裝
幀
風
間
完

壞

滅

第一章 三・一五事件

一

その朝、治子^{はるこ}はいつもよりおそく眼をさました。隣の息子のベッドはすでもぬけの殻であった。女中のシマがいつもの時間に起しにきたのは知っているが、あと一雄がいつ家を出て行ったのか知らない。女中を相手に一人で食事をして、一人で学校へ出かけたのだろう。小学校二年生だが、手のかからない子だ。

風呂場で夫の山村洋一郎が鼻唄をうたいながら髭をそっている気配がしている。鼻唄といい、時々勢よい湯を流す音といい、ゆうべ遅くベロベロに酔って帰った夫とは別人のように活いきとしている。ゆうべの酔態なぞどこ吹く風か、といった様子だ。生活力が旺盛なせいであろう。

酒に酔った時の夫は、悪い癖で、何のかんのとしつこくからんでくる。昨夜も部屋に押入ってきていきなり挑むので、断わると、

「あんたには愛人があるだろう……誰だ、名前を言いなさい」

としつこくからまれて、困った。

仕方がないので、子供に眼をさませないためにも夫の部屋に向いたが、夫はあの最中にも愛人の名前を言えとしつこく繰返し、ホトホト手を焼いた。夫が静かに軒をかき出したのは、午前二時を少し上廻っていた。

治子はバジャマの上に厚地のガウンを着ると、すぐ立って部屋のカーテンをあけた。空がよく晴れていて、眼の眩むような明るさである。この数日間、雨が降ったり止んだりして肌寒い日がつづいたので、よけい明るく思われたのだろう。青い空をじっとみつめると、そこはかとなく潤んでいて、春がもう間近にきていることが感じられる。しかし地上はまだうそ寒く、今日も北風であることが向かいの風呂屋の煙突の煙でわかる。

朝々、ベッドをはなれると、すぐカーテンをあけて空を見るのが、治子の日課のはじまりである。天気が好ければ気分が軽く、その日は何かいいことがあるような気がして心がおのずから弾む。だが、天気が悪いと気分が重く、何となく憂鬱で、いらいらして、一日じゅう心が弾まないのである。

そういう治子を夫の山村は、

「お天気屋——」

と批評する。

治子は自分でもそう思う。だが、それと知りながら、自分で自分がどうにもならないのである。

部屋を出て中廊下を歩いて行くと、山村が風呂場の内から声をかけた。

「すぐ入ったらどう……あなたにちょうどいい加減な風呂だ」

山村はやや熱加減、治子はぬる加減が好きなのである。

今朝は風呂がぬる加減のせいか、山村はいつもよりゆっくりに浸っている様子である。

「はい、入ります」

反射的に返事をして、手洗いに入る。

ゆっくり用を足したり、口をすすいだりして、頃合いを見はからって風呂場へ行くと、山村はまだ素裸で鏡の前に突立っていて、髭そりあとを撫では、自分の顔をとみこみしていた。

脱衣場がせまいので、大人がふたり入ると一杯である。それに治子は夫の前で裸体になるのが嫌いなちである。

「早くお出になって……!」

背を壁にくっつけて道をあげると、山村の手がのびてきて治子の頰を持ちあげ、すばやく唇を押しつけた。

それがすむと、山村は治子から少し顔をはなして、

「あんたは、近頃とてもきれいになったよ」

前後、深酔いして醜態を演じた翌朝、必ずやる山村の演技である。

「バカなことを言わないで、早く……!」

足を踏み鳴らしてせき立てると、山村は丸っこい体を曲げてゆっくりとパンツをはき、シャツを着ただけの姿で行った。

治子が風呂からあがって、食堂に出て行くと、山村は一人でパンにバターを塗っていた。洋服を着込んでいる。食事が済んだらすぐ出かけようという寸法である。

「今日は病院で大きな手術が一つあるんだ」

山村は腕時計を見ながら言った。

「何の手術?」

「胃の手術……ガンらしいんだ」

「男? 女?」

「中年の男だ」

「ガンじゃ、手術してもなおらないわね」

紅茶にレモンを入れて掻き廻し、一口のむ。

「なおる場合だつてあるさ」

「その人、何屋さん……お金持ち……?」

「サラリーマンだ。それも奥さんが貧相なりをしていたから、下級サラリーマンだろう」

「お気の毒ね」

「さて、と……」

山村はもう一度腕時計を見る。

自宅から私鉄の駅まで歩いて六分、新宿駅まで十分、新宿から御茶ノ水駅まで省線で十八分、御茶ノ水駅から病院まで歩いて十分……正九時までに大学病院の外科の助教授室にすべり込もうという算段である。

「あなた、わたしがお気の毒といった意味……お分りになった？」

紅茶の湯気に向うで、治子の眼がいたずらっぽくまたいた。

「患者が気の毒だ、というんだろう」

山村は用心ぶかく妻を見返した。言葉尻を捕えられて落し穴へおとされる苦い経験をたびたび持っていたからである。

「結局はそうだけど、その手前にもう一つあるのよ」

「……？」

「その患者さん、あなたのような酔っぱらい医者にかかって、ほんとにお気の毒だったこと……」

なんだ、そんなことか、といった顔を山村は急いでして、「その方なら、大丈夫……前の晩、いくら飲んだって、こ

と手術ともなれば、絶対自信だ」

「でも、あんなに酔ったら……それに睡眠不足でもあるし……少しは手術のカンにさわるでしょ？」

「少しは、ね」

まともに受けて、頭を少し振ってみてから、

「いや、これくらいな頭の重さなら、手術には差支えはない。それにぬるい湯にだいぶ長くつかったから、二日酔いはほとんど発散してしまったよ」

山村は起ちあがった。

「でも、大手術のある前の晩は、あまり深酒しないで、早く寝るようにした方がいいわね、相手の人命にかかわることですもの」

「こんどから、そうするよ」

女中のシマが鞆を持って出て、玄関の扉をあけた。

治子も玄関まで送って出て、

「今日は、講義のある日……ない日？」

「今日はない日だ」

山村は靴に足を突込みながら答えた。

「それで、ゆうべはのうのうと飲んでいたってわけなのね」

「そうばかりじゃないが……」

あいまいな苦笑を残して、山村は出て行った。

二二

夫を送り出してから、日課のイタリア語の勉強を一時間ほどやり、それから夫の書斎や居間の片付けものなどして

いると、じき正午近くなつた。

女中のシマが昼食の用意をききにきた。

「そうね」

治子はそれが癖の早いまばたきをして、

「おひるの用意はいらないわ。どうせ買物や何かで外出する用事があるし……ついでに外でたべるから……」

買物は夫と子供の春に着る薄手のスエーターである。ずんぐりで見栄えのしない山村は、一見無造作な男に見えるが、そのくせなかなかのおしゃれで、もう大分前から春先に着る薄手のスエーターを買ってくれ、と何度もせがまれていたのである。治子はどっちかというとおしゃれな男性を好むたちであるが、しかし現実には夫の山村がしゃれるということは、どうにも我慢できなかった。何かしら厭なものである。そのため薄手のスエーターを買うのはのびのびになつていたのであるが、二、三日前、ふと子供にスエーターを買ってやろうと思いついた時に、ついでに夫のも買ってあげようという氣になつた。その代り、夫の申し出の黄色でなく、グレーか何かの地味な色合いのものにするつもりだった。

治子は、この日、買物のほかに外出する用件が三つほどあつた。一つは飼犬のセバードが発情したので、日本橋の犬屋へ寄つて、種犬を世話して貰ふことと、もう一つは独習のイタリア語が大分上達したので、童話の「ピノキオ」

を翻訳することを思い立ち、その原書を取寄せることを丸善に依頼すること、あとの一つは午後三時に日本橋三越前の小さな喫茶店で人に会うことであつた。最後の用事の相手は「無産者新聞」の編集をしている根上栄一という青年で、毎週金曜日の午後三時にそこで会う約束であつた。

治子はこの根上とは、彼がまだT大の学生だった頃からの知合いで、何かの寄付金を取りにきたのが縁で急に治子の家に親しく出入りするようになったのだった。だから、夫の山村とももちろん懇意な間柄で、訪ねてくると一緒に食事をしたり、衣類をくれてやったりして、いわばパトロンのような形で付合つてきた。根上の実家は名古屋で豆腐屋を営んでいるとので、半ば苦学生であつたが、気象が素直でのびのびしているところが治子にも山村にも好かれていた。

その根上と治子とが、近頃、街頭での秘密連絡のような会い方をしはじめたのは、別にハッキリした目的や用件があつてのことではない。いわゆる「七月テーゼ」——一九二七年（昭和二年）七月、モスクワのコミンテルン（国際共産党）常任執行委員会で採択された日本に関する決議にもとづいて再組織された日本共産党が、さきごろの普選第一次総選挙戦で「労働農民党」を支持し、文書戦ではあるが「労働者農民の政府をつくれ」というスローガンを公然とかかげて大衆の前に姿をあらわし、また「無産者新聞」

にもハッキリそれと分る指導論文を掲載していたので、いつ当局の弾圧が加えられるか知れない危険な状態にあったし、無産者新聞社で働いている根上は、いつ警察へ引張られるかも知れない、そういう根上が山村家に公然と出入りすることは危険でもあったので、

「ぼく、もうなるべくお宅へ伺わないようにしますよ」

と根上がいい出したのが、偶然に二人で入った三越前の喫茶店だった。

その日、治子は外出する用事があって、訪ねてきた根上と一緒に家を出て用事を足し、歩きながらその店が眼に付いたまま入ったのである。

店はいくらか伝統のある屋号の店で、洋菓子も自家製を商っているが、店の構えや作りが旧態依然たる有様なので、あまりお客は入って居らず、したがってひっそりと話し込んで居るには持って来いの場所だった。

「それだったら、どう？」

治子は早いまばたきをして、

「週に一回、日と時間をきめて、ここで会うことにしたら……ここは静かで、話をするのに好きそうだな」

すると根上は、治子の提案がよく理解できないような顔で黙っていた。だが、つづいて治子はずかしがる時によくする泣き笑いに似た笑いを顔にうかべて、

「それに、わたし……あなたから時々新聞を貰う必要があ

るし、時々は運動の情勢も知りたいし……」

根上はようやく理解ができた顔で、

「そうですね。じゃ、そうしましょう」

と即座に応諾したのだった。

何やらこちらから懇請したような形で、治子は一瞬バツの悪い思いに頬を赧らめたが、しかし真実のところ、根上との接触は断ちたくなかった。根上を通じて革命運動の実感にじかに触れていたかった。そうしないことには、何か現在の生活が不安に感じられて仕方がなかったからである。

夫の山村洋一郎も共産主義運動に対する同情者であるが、山村は論理的な秀才肌の男で、共産主義に対しても理詰めで入って行けるが、治子はどっちかというと感性的に感じ取るほうだから、いつもその実態に触れていることが必要なのであった。

治子と根上との私的な街頭連絡はそうしてはじまったのだが、山村はそれについては別段いいとも悪いとも言わなかった。治子のいくらか常識のはずれた子供じみた行爲として、苦笑をもって認容している風であった。もっとも、そのくせどうかすると、治子と根上との間を疑い、愛情の取引きがなかったかどうかを責めたてるようなことも折々はあるにはあったが……。

治子が犬屋と丸善の用事を済ませて三越前の古風な喫茶店の二階にあがったのは、三時二分前であった。すると壁

際の椅子に根上が腰かけていた。山村のお古の外套を着ているが、肘のあたりが大分いたんで、すり切れそうになっている。

根上の前にあるコーヒー茶碗の中身は半分ほどに減っていた。

「あら、ずいぶん早かったのね……だいぶお待ちになった？」

治子は黒の外套を脱いでかたわらの椅子の上に置き、紺のマフラーとベレー帽も取ってその上にのせた。丸善から急ぎ足に歩いてきたので、少し汗ばんでいた。

根上はその治子の動作を眼で追いながら、

「少し早く来たもんで……歩いてても仕様がなし……」
何やらあいまいに口籠った。

「そう」

治子はいき加減にきき流して、

「あなた、お腹、すいてない？」

「少しすいてる」

「わたし、おひるをまだ食べてないのよ。サンドイッチを貰うけど、あなたはどうか？」

「結構ですな」

「結構って、要るってこと……要らないってこと？」

「大いに要ります」

「結構なんて、上品そうな言葉を使うもんだから……」

治子は断髪の頭をふって、かたわらに立っていた給仕の少女にサンドイッチと紅茶を注文した。

「そう言えば、ほくもまだ昼めしを食べていないんだ」

根上は眼鏡の奥で澄んだ眼をまたたかせた。

「どうして……お金がなかったから？」

「それもあるけど、実は……」

根上はすばやくあたりを見廻してから声をひそめて、

「今朝、東京市内で一斉検挙があったらしい」

「一斉……?!」

治子は声をのんだ。

「夜明け方だそうです。電報……とか何とかいって戸を叩かれて、開けたところを踏み込まれて検挙されたらしいんです」

「それで、あなた、よく捕まらなかったわね？」

治子はやっと声を押し出した。

「ほくなんか物の数じゃないから……でもちょっとあぶなかったんです」

根上がそう前置きして話したところによると、彼は今朝十時すぎにいつものように芝の無産者新聞社へ出かけた。

何気なく社へ入ろうとすると、入口に見知らぬ中年男が二、三人突立っていたので、変だと思い、そのまま通りすぎた。うしろから呼び止められたような気がしたが、路地から路地へ抜けて逃げてしまった。それから根上は友人の

家に赴き、友人と二人で手分けして方々様子をさぐったが、共産党员と思われる大物はあらかた検挙されていた。中には危険を予想してあらかじめ姿を晦ましていた者もあるが、それはごく僅かで、検挙された者の数の方がはるかに多い様子だった。

「……山懸も捕まったらしい！」

山懸こと山本懸蔵は、労働運動の古い闘士で、さきごろの総選挙には、持病の肺患にもかかわらず北海道から労農党候補——実は共産党员——として出陣し、吹雪の中を駆け廻って善戦したが惜しくも落選し、そのために一そう病気を悪くして、ずっと病床に籠っていたのだ。

「肺病で寝ている病人まで引張るなんて、ずいぶんひどいことをするものね」

「何しろこんど改悪されようとしている治安維持法には死刑まであるんだから、病人だろうが何だろうが、委細かまわず引張りますよ」

「今日は何日？」

治子がきいた。

「三月十五日……」

二人がそんな話を交わしていると、階段口に中折帽をかぶった男がヒョイと現われた。平べったい顔の三十男で、連れでも探すような様子で室内を見廻したが、その眼つきからすぐ特高刑事と直感された。だが、そこへ給仕の少女

が注文のものを運んできたので、よい按配にその男の視線をさえ切った。

男はもう一度室内を見廻してからトコトコ降りて行った。
「今の……あれじゃない？」

治子が低声でいうと、根上はだまってコックリをした。

「今日はいささか陰吞ね。あまり長話しもし居られないわね……そろそろ引揚げましょうか」

「そうしよう」

「このつぎ、ここで会うのは、何だか危険みたいね……場所を変えましょうか」

根上はちよっと考えてから、

「いや、もう一度、ここを使いましょう」

二人はサンドイッチを食べ、ゆっくりと紅茶をのんでから立ちあがった。

階下で、治子はカモフラージュに洋菓子を一箱を根上に持たせた。

「それでは、さようなら」

「さよなら」

二人はわざと声に出して言って、左右に別れた。

三

治子が新宿で食料品を買って帰宅すると、夫の山村は先

に帰っていた。

「あら、今日はまたずいぶん早いご帰宅なのね？」

治子は皮肉めかして言ったが、山村はそれには応じないで、いきなり、

「おい、今日は暁の大検挙があったらしいぞ」

と眼を丸くしてあびせた。

「わたしもそれを聞いてきたところなの」

「誰に聞いた？」

「根上さん……」

「ああ、例の日か、今日は……根上君は、よく捕まらなかつたね？」

「それがあぶなかったらしいんです」

治子が根上からきいた話をつたえると、山村はちょっと首をひねって、

「しかし、根上君はまだ運動経歴も浅いから、警察でもそうマークしていないだろう」

「そうかしら……でも、わたし、何だか根上さんは捕まるような予感がしてならないの」

「そりゃ、あんたが根上に好意と期待を持ち過ぎるから、そう思われるんだよ」

「変なこと言わないで頂戴！」

治子は半ば本気に怒った。

治子の予感が適中した。

それから五日後の午後のことだった。

治子がセバードの種付けから帰って、犬に水を飲ませたり、ブラシを掛けたりしていると、そこへ女中が来客を占げにきた。

「あまり服装のよくない、朝鮮人らしい男です」

「わたしに会いたいですか？」

「そうです。ぜひ奥さんにお眼にかかりたいって……」

「何だろう？」

いぶかりながら玄関に出て行くと、三和土の暗がりにも、寸の詰った古びた洋服を着た、背の高い男が立っていた。

「どなたですか」

治子が用心して身を引き気味にたずねると、男は眼をピカリと光らせ、

「別に名前を申し上げるほどのこともないです……これを頼まれたから、届けに来たです」

と朝鮮人の訛で言って、ポケットから小さく畳んだ紙片を取り出して渡した。

治子がおっかなびっくりに開くと、チリ紙に鉛筆で書いた、きわめて判読し難いものだったが、根上からの手紙であることがすぐわかった。

注意ぶかく読み下して行くと、

十六日午後一時、無産者新聞社ノ様子ヲ見ニ行ッテ捕

マッタ。芝ノ愛宕署ニ居マスガ元氣デス。

コノ使ノ男ハ万引キヲシテ捕マッタノダソウダガ、根ガ善良ソウナノデ、使ヲ頼ミマシタ。無事ニコノ手紙ガ届イタラ、オ駄賃ヲ少々ヤツテ下サイ。

「やっぱり……?!」

と、治子は胸の中でつぶやいた。

眼先が昏くなり、胸がしきりに騒いだ。喉がカラカラに乾いて、何度か生つばをのみこんだ。そのうちに「コノ手紙ガ届イタラ、オ駄賃ヲ少々ヤツテ下サイ」という手紙の文句を思い返し、「オ駄賃」などというユーモラスな文句が使えるようなら、根上は落着いて居るに違いない、と思った。すると胸騒ぎも喉の乾きも一ぺんにスーとなくなった。

治子は朝鮮人の方に早いまばたきを送って、

「ちょっと待って下さいね」

といい残して、居間へ引返した。

治子をはじめ「オ駄賃」を一円やるつもりだったが、ふんばつして三円やることにした。

「どうも有難う。これ、ほんの少しですけど……」

紙に包んだものを渡すと、男はだまって受取って、ペコリと頭をさげて出て行った。

その晩、山村はまた酔っておそく帰宅したので、治子は

根上が逮捕されたことは、翌朝の食事の際に話した。

「……やっぱり、わたしの予感が当たったでしょ」

治子は妙なところで、自分の「予感」を自慢にした。

「しかし根上君は、何だってまた特高の張り込んでいるところへノコノコ出かけて行ったのか……まるでわざわざ捕まりに行ったようなもんじゃないか」

山村はそうくさした。

「そう言えばそうですけど、仕事熱心な根上さんのことから、様子を見て、張り込みが居なかったら、中へ入って、誰かと新聞をつづけて出して行く相談でしよう、と思ったんじゃないかしら……?」

「それは、まあ、はなはだ好意的な観察ではあるがね」

山村はクフンと鼻を鳴らして立ち上り、膝の上のパン屑を払った。

「あなた……」

治子は夫を急いで呼び留めて、

「わたし、今日、愛宕署へ差入れに行こうと思うんですけど、いいかしら……?」

何を突拍子もないことを！　と言いたげな顔を妻に向けたまま、山村は黙っていた。

「だって、根上さんは東京には一人も身よりが居ないでしょう。元氣だといってもまだ若い青年で……差入れでもして、激励してやった方がいいと思うの」

「山村治子……で差入れするんですか」

山村はやっと重い口をひらいて、妻を見た。

「そうです。まさか根上治子とも言えないでしょう」

「本人との間柄を警察できかれたらどうする？」

「イトコぐらいい言っときます。まさか姉というわけにも行かないでしょう」

「うむ」

山村は呻って、

「それで通ればいいが……」

「通るか、通らないか、試しにやってみます」

「それはあんたの勝手だが……？」

「それにあの人、街頭で捕まったんですから、洗面道具も下着の着換えもないでしょう……だから、今日、そういうものを揃えて持ってって上げます」

「持ってってやるのはいいが……この際は、なるべく危険な場所には近付かないことですよ」

山村は最後の言葉を優しく、しかし捨科白のようにいい残して、食堂を出た。

四

南風が吹いていて、暖かな日だった。

治子は新宿で差入れ物を買いととのえると、青バスで四

谷塩町まで行き、そこから飯倉行の市電に乗換えた。この電車は車体が小さい上に古ぼけていて、まるでローカル線のような感じである。治子の好きなコースであった。

電車が赤坂見附にさしかかると、弁天池は折からの好天気、ボート遊びで賑わっていた。それは見るからに陽気な景観であった。だが、じっと見ていると、その陽気な景観と、これから警察の陰惨な留置場にいる人に差入れに行く自分の姿とが、あまりにもチグハグな感じで、ちよつとの間、その違和感を持てあつかいかねた。

それに治子は、警察署に差入れに行くのははじめての経験である。あの野暮ったい黒の制服を着た男たちの出入する薄暗いコンクリートの建物の中に、自分が用事を持って入って行くなどということは思いも寄らなかった。だが、いまその思いも寄らなかったところへ行こうとしているのだ、と思うと、治子は自分の行為に突拍子もない大胆不敵さを感じるとともに、思いがけないスリルを味わうような快感もひそかにいだいた。

御成門で電車をおりると、愛宕警察署はすぐ眼と鼻の先にあった。

野暮ったい制服を着て事務を執っていた中年の警官に用件をつけると、

「それなら、二階の特高室へ……」
と、わきの階段を指差した。